

喫茶マノンと松本長蔵

桑高同窓会長 西羽 晃

桑名駅西口から桑高への登り口、円妙寺の向いに洋館があるのを、ご存じの方もあると思いますが、松雅亭という料理屋の一部でした。戦災で桑名市街地の料理屋が焼失してしまったが、ここは戦災を免れたので、戦後は非常に流行った店であった。現在は松雅亭は廃止になり、大部分はコンビニなどになっているが、洋館は別に売却され、新しい所有者が修復し保存されている。この洋館の設計者不明だが、ライト（東京の帝国ホテルを設計した人）の作風によく似ており、ライトの弟子の設計とも言われる。

この洋館の一部を利用して、今年の9月3日に「マノン」という喫茶店がオープンした。小部屋の一室だけの喫茶店で、ガーデンテラスも利用することができる。主体は自家製のフランスパンで、ランチもある。パンだけの販売もしている。高校生には値段がやや高いが、一般の女性には受けそうな店で、男一人では入りにくい感じだする。



そもそも松雅亭の建物は松本長蔵の邸宅であった。彼は昭和 18 (1943) 年 4 月 1 日に病死した。享年 82 歳であった。4 日に照源寺で告別式が営まれた。大山田村長から西桑名町長を 20 年間にわたり勤め、昭和 12 年に桑名町との合併を果たし、桑名市の誕生を実現させて、政界を引退した。訃報を伝える当時の新聞では、「往年は米穀取引所の大立物として活躍したが、晩年は北勢電鉄社長はじめ多数の会社重役をつとめ、北勢実業界に重きをなしてゐた」(昭和 18 年 4 月 2 日付け『伊勢新聞』)。

松本長蔵は強気一点の人と言われるが、米相場で資産を増やして、田地はもとより各種の事業にも手を広げた。大山田村長の時に、桑名中学校の建設問題が起きたが、桑名町には広い敷地を確保できなかったもので、彼が地主たちをまとめて大山田村の尾野山の土地を確保した。しかし予定よりも 6,000 円も費用が高くなって、彼が 3,000 円を負担している。この土地が現在の桑名高校の場所である。

事業の一つに住宅開発もある。大正末から昭和にかけて、小野山一帯に木造洋風の文化住宅約 50 戸、和風住宅約 80 戸の団地を造り、付近は「松本村」と言われた。この団地に供給する上水道の松本水道も開発している。当時の文化住宅は現在では殆ど建て替えられているが、まだ一部に見られる。

彼が晩年に力を入れたのは北勢鉄道（現在の三岐鉄道北勢線）である。昭和

3年に彼が北勢鉄道の社長となり、難航していた阿下喜乗り入れを昭和6年に実現させ、同時に全線を電化させた。砂利採取・運搬、貨物自動車、乗合自動車なども兼営した。中でも砂利採取は員弁川で砂利を採取し、貨物列車で運び、西桑名駅近くで国鉄に積み替えられ、各地に送られた。日本が戦時体制に突き進む中で砂利の需要が高まり、大きな利益をもたらした。

太平洋戦争が始まり、企業活動への規制が強くなって、彼が活動する場も少なくなった。その中で昭和18年4月に彼は亡くなった。政府（軍部）の強力的な指導で、翌年の2月には県下の小私鉄は合併統合された。北勢電気鉄道（昭和9年に社名が改称されていた）は抜群の利益率を誇っていて、株主は強く反対したが、押し切られた。強気の彼が合併を知らずに亡くなったのは、むしろ幸いだったかも知れない。